

# 岡本韋庵『国史紀要』『義勇芳軌』について

有馬卓也

## 目次

はじめに

第一章 岡本の歴史叙述

第二章 『国史紀要』——日朝関係史から

第三章 『義勇芳軌』——義勇なる女性たちから

おわりに

はじめに

明治時代を生きた知識人たちが国家のあるべき姿・進むべき方向を論じる場合、政府あるいは政治に視線が向けられた著作と、国民に視線が向けられた著作とに大別できる。岡本韋庵の場合、国家の大局は国民一人一人の動向にありとする後者の立場に立つ著作が主流を占めている。そのような岡本の立場が際だつ著作が明治一八年出版の『国史紀要』（大野堯連発行（註一））と『義勇芳軌』（岡本監輔出版）である。両書は岡本の著作全体を見渡した時（註二）、その全体的な道筋が提示された作品でもある。

本稿は岡本が両書に託したメッセージの一端を示すとともに、彼の著作全体の中に位置づけることを試みたものである。まず第一章では著作全体における両書の位置を論じる。続く第二章・第三章ではそれぞれ『国史紀要』と『義勇芳軌』に託された岡本のメッセージに触れてみたい。特に『国史紀要』については日朝関係の問題を、また『義勇芳軌』については婦徳としての義勇の問題を取り上げる。

この試みから岡本が国家（全体）と国家をかたち作る国民（個）に、歴史という手本を通して何を期待していたか、何を求めていたかが理解できるのではないかと考える。

## 第一章 岡本の歴史叙述

岡本が日本の歴史を記した著作は全体の中でも際だつて多い。それらを歴史の流れを俯瞰した通史と、歴史を形成した一人一人に目を向けた個人史に分類すれば次のようになる。

通史―『万国史記』（明治一二、岡本氏蔵版）

『国史紀要』（明治一八、大野堯運発行）

『祖志』（明治二三、哲学書院）

『神道発揮』（明治二七、哲学館）

『皇道鼓吹』（明治二九、神宮教徳島分教会）

個人史―『義勇芳軌』（明治一八、岡本監輔出版）

『越山先生伝』（明治二九、岡本監輔発行（註3））

『大日本中興先覚志』（明治三四、杭州開導社（註4））

『日本維新人物志』（明治三六、金港堂（註5））

通史として編年体国別史の『万国史記』、日本の一国史の『国史紀要』と列伝体の本紀とも言える天皇別歴史『祖志』『神道発揮』『皇道鼓吹』があげられる。また個人史については、阿波出身で文部大臣などの要職を歴任した芳川顕正の伝記である『越山先生伝』、維新志士の列伝である『大日本中公先覚志』と『日本維新人物志』などがある。著述目的はそれぞれ異なるものの、歴史に範を取るといふ岡本の基本的スタンスに変わりはない。

本稿で取り上げる『国史紀要』に先んじて日本の歴史を叙述したものとしては『万国史記』の巻一に「大日本記」及び「大日本記附録」があるが、万国史上での国史であるから、その記述も簡略なものである。また分類上も啓蒙的著作と言え、『万国通伝』（明治一七、集義館（註6））と同列のものと位置づけるこ

とができる。

さて、『国史紀要』は小学生向けの日本史の教科書であり、明治二〇年には文部省の認定を受けている。岡本は本書以外にも教科書として執筆した『小学読本農学入門』（明治一三、薔薇楼蔵版）・『小学新編』（明治一五、岡本蔵版・内外兵事新聞局）・『小学修身新書』（明治一六、未見）・『古今文髓』（明治一八、岡本氏蔵版）などの著作がある。

本書の位置づけを明らかにするため、当時の教育問題について簡単に触れておこう。

明治五年に学制が布かれ、西洋型の実学教育が主流となり、その反発が明治一〇年代に起こったことは周知のことであろう。高橋文博氏は「明治十年代の道徳教育―修身教科書を中心に」（註7）の中で、当時の修身教科書を材料に、その状況を論じておられるが、『国史紀要』の位置づけもここから明らかにすることができると言える。

さて、実学偏重の教育の影響が徳育（道徳教育）に及ぼした弊害を訴えたのが元田永孚による『教学聖旨』（明治一二年）であった。以下簡単に触れておくと、これは「教学大旨」と「小学条目（一）（二）」よりなる。まず「教学大旨」では冒頭で

「教学の要、仁義忠孝を明かにして、智識才芸を究め、以て

人道を尽すは……」

と言ひ、教学の根本が仁義忠孝を明らかにすることにある、その上で「智識才芸」へと及ぶべきであるとする。ところが最近の教育はそうなっていないとし、以下の文に続く。

「然るに軌近専ら知識才芸のみを尚とび、文明開化の末に馳せ、品行を破り、風俗を傷ふ者少なからず」

「維新の始首として陋習を破り、知識を世界に広むるの卓見を以て、一時西洋の所長を取り、日新の効を奏すと雖も、其流弊仁義忠孝を後にし、徒<sup>い</sup>に洋風足競ふ」

かかる状態は「終に君臣父子の大義を知らざるに至らん」と言う。そこで、「専ら仁義忠孝を明かにし、道德の学は孔子を主として、人々誠実品行を尚とび、……」と、德育先行型の教育を主張するのである。また「小学条目（一）」において「仁義忠孝の心は人皆之有り」とした上で、

「其幼少の始に、其脳髓に感覚せしめて培養するに非れば、他の物事に耳に入り、先入主となる時は、後奈可も為す可からず。故に当世小学校にて絵図の設けあるに準じ、古

今の忠臣義士孝子節婦の画像写真を掲げ、幼年生入校の始に先づ此画像を示し、其行事の概略を説諭し、忠孝の大義を第一に脳髓に感覚せしめんことを要す。然る後に諸物の名状を知らしむれば、後來忠孝の性を養成し、博物の学に於て本末を誤ること無かるべし」（「小学条目（一）」）

と言ひ、忠臣・義士・孝子・節婦の顕彰による德育の充実（忠孝の性を養成）が説かれている。

さらに、この德育の方法が教科書として具現化したものが同じく元田永孚の手になる『幼学綱要』（明治一四、宮内省蔵版）ということになる。本書は「孝行・忠節・和順・友愛・信義・勧学・立志・誠実・仁慈・礼讓・儉素・忍耐・貞操・廉潔・敏智・剛勇・公平・度量・識断・勉職」という二〇の徳目を中国と日本の古典に例証を求めつつ解釈していくというスタイルをとっている。

ここに日本（中国）における忠臣・孝子・節婦・義士の顕彰が修身教科書の役割であるとされた時、修身教科書と国史教科書が極めて近い存在であることがわかる。

『国史紀要』の例言に「読者をして豁然忠愛の心を振起せしむ」とあって、国家への忠愛の心を喚起するための国史教科書であるとの位置づけが明言されている。めざす所は『教学聖旨』『幼学綱要』と同一線上にあると言つてよい。

さらに日本と中国における義勇なる者の列伝である『義勇芳軌』は先の忠臣・義士の例示にほかならない。その序文に

「忠勇義烈の行は、……赤心報国より出づ。……吾嘗て和漢の史を閲し、忠烈の蹟を探り、窃かに其の師表とすべき者を採ふ。……区区たる報国の志、自ら已むあたはざるのみ」(『義勇芳軌』岡本自序)

と述べる通りである。

したがって、歴史叙述を超えた徳育のための『国史紀要』であり、『義勇芳軌』であつたと言つてよい。

また、先に掲げた高橋文博氏の論文に示されているように、当時の修身教科書のスタイルの中には、西洋や東洋の箴言を集めたものもあつたが、その範疇に入る岡本の著作として『要言類纂』(明治一二、岡本氏蔵版)、『鉄鞭』(明治三四、上海商務印書館)、『西学探源』(明治三四、上海商務印書館)があることを付記しておく。

## 第二章 『国史紀要』——日朝関係史から

さて、『国史紀要』は、漢字片仮名交じり文で書かれた上に、地図や挿し絵なども入り、読みやすいものとなっている。構成

は本編が歴代天皇ごとに歴史を配列し、附録がそれを補完する形で制度・農業・貨幣・外交・宗教・風俗などについて触れている。

目次は以下の通り。

卷上…建国体制・神武東征・崇神征不庭・垂仁停殉・景行平戎  
夷・神功征三韓・応神興文教・仁德恭儉・顯宗仁賢相讓  
・百濟獻仏像・天智中興・文武修制度・押勝道鏡之乱・  
桓武平蝦夷・出羽之乱・宇多登庸道真・延喜天曆之治・  
天慶之乱・源氏平東国・保元平治之乱・平氏專横・附録  
(制度沿革・勸課農桑・工匠技芸・三韓朝貢・通使隋唐)

卷中…諸源滅平氏・源氏開朝府・北條滅源氏・承久之変・陪臣  
專權・元寇之变・後醍醐平鎌倉・尊氏之反・後醍醐幸吉  
野・室町政權・武臣割拠・信長鎮京畿・秀吉制服群雄  
・秀吉征朝鮮・関原之戰・附録(法制沿革・農事商業・  
外邦通好)

卷下…家康定霸業・島原之乱・上下恬熙・列藩記事・外交訂盟  
・大政維新・西南之乱・朝鮮之变・附録(制度沿革・農  
工商業・教法宗派・風俗変遷)

本章では、岡本の對外思想を知る上で重要と思われる日朝交  
渉史をピックアップしてみたい。これに関連して、岡本の『烟



台日誌（写本）（註8）に次のような記述がある。

「中に一人あり。進て曰く「日本国は何の処に在るや。將た朝鮮が国王は何の姓ぞ。文教風俗は中国と同じきや否や。」余曰く「朝鮮は古より日本に服役するものなり。日本の匹敵に非ざるなり。天皇は姓なし。特称して天皇天孫と曰ふのみ。文教に至りては、中国と同じきもの多きに居れり。……」（『烟台日誌』明治7年10月30日）

本日誌は岡本が山東地方を経巡った際の日記なのだが、これは移動中の船の中での様子を記したものである。清人の問いに対し、「朝鮮は古より日本に服役するものなり。日本の匹敵に非ざるなり」と述べている。ちなみに『万国史記』においては、朝鮮国は一国として章立てされておらず、巻四の亜細亞諸国記の筆頭に収められている。そこにも冒頭に「古、我が属国たり」と見える。これは当時の日本における朝鮮観としては特異なものではない。特に神功皇后の朝鮮出兵・任那日本府・豊臣秀吉の朝鮮出兵などを根拠として多くの知識人たちが同様の論を立てている。たとえば吉田松陰を例にとれば、『講孟剖記』尽心卷上二〇章、『幽囚録』、『丙辰幽室文稿』所収の「久坂生の文を評す」「久坂玄瑞に復する書」、『丙午幽室文稿』所収の「対策一道」「愚論」等、枚挙に暇がない。もっとも吉田の場合、ペリー来

航依頼の日本の情勢を憂え、嘗て日本が近隣諸国に対して国威を発揚していた例としての神功皇后であり、豊臣秀吉であるから、ここでの岡本の主張と直接つながるわけではないが、これが当時の前提であつたことは認めてよからう。

『国史紀要』の中で、岡本が日朝交渉に言及している部分はどうと、まさに巻上の「神功征三韓」「三韓朝貢」、巻中の「秀吉征朝鮮」であり、それに巻下の「朝鮮之変」が加わる。

記述はいずれも淡々と当時の認識における歴史事実を述べるもので、特に岡本のコメントが入っているわけではない。例として「神功征三韓」を示しておこう。

「第十四代仲哀天皇十二年、氣長足姫を立て皇后と為す。神功皇后是れなり。……皇后、乃ち舟師を帥いて西し、徑に新羅に至る。戦艦海を蔽ひ、鼓声天に奮ふ。新羅王、大に驚き、面縛して迎え降り、質を納れ盟を立て、歳に金銀彩帛八十船を貢せんことを約す。高麗・百済も亦た皆な款を納れ曰く「永く西蕃と称して調貢を絶たず」と。因りて内官家を定め、戊を置いて凱旋す」（『国史紀要』神功征三韓）

末尾に朝鮮の側からの「朝貢」の意志が示されているが、他の「三韓朝貢」「秀吉征朝鮮」においてもそれは強調されている。具体的には「朝貢怠らず」「屢々朝貢を闕く」「復た朝せず」「朝

貢す」「是より朝貢絶たず」「書辞太だ無礼なり」などとあつて、朝鮮から日本への朝貢の有無、或はそれに伴う礼の有無を軸に日朝交渉史が語られている。

では、岡本が自ら見聞した「朝鮮之変」の全文を以下に見ていくことにしよう。全体が三段に分けられているので、順次示していく。

まず江華島事件とその後の日朝修好条規に関する記述である。

「明治八年。我が軍艦、清国に航せんとし、薪水を朝鮮の江華島に取る。守兵の砲撃する所と為り、応戦して其城を抜く。九年。陸軍中将黒田清隆を朝鮮に遣り、修好を議し、江華の事を理す。朝鮮、前事を謝し、修好条規・貿易規則を交換す。尋で其礼曹参議金綺秀をして来聘し、隣好を修せしむ」（『国史紀要』朝鮮之変）

先に示した「神功征三韓」と同様、淡々とした記述であるが、注目すべきは書かれていない事項であろう。小学生用国史教科書には難解である、或いはそぐわないという岡本の判断であろうか。或いは文部省の認定に伴う修正の可能性もある。

一〇日以内に回答がなければ武力行使を行う旨通達して締結した日朝修好条規の第一条「朝鮮国は自主の邦にして日本国と平等の権を保有せり」が持つ意味、及び貿易規則における不平

等条約の強制に対する言及はない。

次はソウルで起きた兵士・市民による反日暴動、壬午軍乱の記述である。

「十五年。朝鮮の暴徒、我が公使館を襲ふ。是より先、辨理公使花房義質、朝鮮京城に駐在し、勧むるに富国強兵を以てす。国王之を喜び、我が陸軍士官を聘して衛兵を訓練す。其国人も亦我国に就きて学芸を講習する者多し。士民の鎖国を唱ふる者、物議囂然たり。姦徒之に乗じて頑民を煽動し、王宮を犯し、権臣を殺し、急に我が公使館を囲む。義質、随員二十七人と拒戦す。朝鮮政府、敢て来り救はず。義質、囲を衝て仁川に至る。暴徒亦た起り、我が良多く之に死す。義質等、英艦に托して赤間関に達し、状を奏す。乃ち義質をして水師を率て京城に至り、其罪を問はしむ。朝鮮惶駭し、義質に就て款謝し、撫恤金五万円、陸海軍費五十万円を償ひ、乱党を捕獲し、巨魁を嚴治す。後ち其四十万を朝鮮に還す。世之を義とす」（『国史紀要』朝鮮之変）

ここでも清国軍が鎮圧に乗り出し、朝鮮国の人心が清国に傾き、日清関係が最悪の事態に陥ったことへの言及はない。

最後が独立党の金玉均らが事大党から政権を奪い返すも、二日で清国の攻撃を受けて壊滅し、金玉均が日本に亡命すること

となつた甲申事變の記述である。

「十七年十二月。朝鮮變あり。大臣數名、其刺す所と爲る。国王、使を我が公館に馳せ、以て護衛を請ふ。公使竹添光鴻、兵を率て王宮を警備す。暴徒、闕を毀ひ、火を縱ち、清兵之に應ず。我兵、衆寡敵せず、重囲を衝て公館に還る。暴徒來り攻む。陸軍大尉磯林真三以下三十九人、之に死す。公使乃ち士民を収て難を仁川に避け、狀を奏す。初め朝鮮二党あり。一を獨立党と曰ひ、専ら我政体に摸倣し、弊習を釐革せんとす。朴泳孝・金玉均等、之が領袖たり。一を事大党と曰ふ。清国に依頼し、旧習を株守す。挙朝概ね其党なり。兩党常に軋轢し、遂に此變を醸す。朝廷乃ち外務卿井上馨をして往て其罪を問はしむ。朝鮮、罪を謝し、金十一万円を撥支し、兇徒を刑に処し、公館を新建し、修信用使徐相雨をして來聘し、以て前事を謝す。尋で參議兼宮内卿伊藤博文を清国に遣り、朝鮮の變・日清交渉の事を理す。兩國の和誼益々敦し」（『国史紀要』朝鮮之變）

本事實を受けた天津条約により朝鮮国における清国の政治的地位は強化されており、最後の「兩國の和誼益々敦し」という記述は首をかしげざるを得ない。翌一八年には大井憲太郎らが、自由民権派の青年壯士を朝鮮に派遣し、親清派の閔妃一族を殺

害して朝鮮を清国から獨立させようとした大坂事件が起こっているだけになおさらである。当時における他の国史教科書等と比較検討する必要がある。今後の課題である。

また一五年・一七年の記述の中に「頑民」「弊習」「旧習を株守」などの言があり、岡本のスタンスを確認することができる。これに関連して、岡本が明治二六年に初期アジア主義者として知られる樽井藤吉の『大東合邦論』に序文（註9）を寄せていることに言及しておきたい。そこには次のような文が見られる。

「余嘗て清国に遊び、其の土宇の広遠にして、政令の普くし難きを觀る。窃に一策を画す。謂らく「宜しく國を分ちて四五と爲し、自ら美田數百夫を領し、其の余は尽く賢者に譲るべし。而して君統の伝はりし已後は、大權、彼の身に止まらん。蓋し其れ合縱締盟して、交こも相扶持し、以て内治を保ち外侮を禦せんと欲す」と。丹芳（樽井）の合邦の意と相表裏を爲す者なり。然れども余の策は、徒に他人の過失を陳ぶるのみにして、而も其の言は幾千に過ぎず（註10）。

固に太だ簡たり。丹芳の語を己に反して其の非を知るにしかず。而して堂堂數萬言、剴切・詳明・的確なり。丹芳の如き者は、先覺の士にして能く斯の民を覺らしむる者と謂ふべし。朝鮮人を顧みるに、固陋の性と成り、其の海外の事情に通ずる者は極めて寡なし。則ち其の丹芳の言に於て未だ必ずしも狐疑する所あ

るを免れざるを恐る」(『大東合邦論』序)

ここに「朝鮮人を顧みるに、固陋の性と成り、其の海外の事情に通ずる者は極めて寡<sup>すく</sup>なし」とあって、樽井の主張に多少危惧の念を抱いている。ただし、序文であるから最終的には

「丹芳の此の編に拠りて、則ち今日の合邦の事を知る。実に我が兩國の失ふべからざるの機会たり。以て大いに宇内に為すことあるべきなり」(『大東合邦論』序)

とまとめている。また明治二十四年の『北地国防論』(写本(註1))には欧米列強のアジア侵略を述べた上で、次のような記述がある。

「三国の勢は……清唇たれば日韓齒<sup>は</sup>たり。日韓唇たれば清齒<sup>は</sup>たり。清中堅たれば日韓之れが翼<sup>は</sup>たるは、是れ其大小伍置<sup>おのづから</sup>自然ればなり。蓋し兵家の兵を用ふるや、必ずしも直入中堅を衝かず、何れか一方薄弱なる点に向ひ、全力を尽して之れに当り、其羽翼を絶ち、而して後胴体に及ぶは敢て疑の容れざるなり。然れども此三国中、何れか強、何れか弱なるかは、容易に判断する能はずと雖も、小者の与<sup>く</sup>みし易きは自然の理。而して亦薄弱なる点は多く羽翼の辺にありとす。

然らば、則<sup>すなわち</sup> 彼等の運動上、最も便宜にして且<sup>く</sup>与<sup>く</sup>みし易きは、嗚呼、其れ日韓の二国なる哉。二国既に無ければ、支那羽翼なきなり。羽翼なければ鷲<sup>じゆ</sup>鳥と雖も、痴兒能く之を撃す」(『北地国防論』)

ここでは日清朝三国は運命共同体であるとし、さらに「二国の運命は支那に先だつ。二国滅びざれば支那滅びず、支那滅びざれば東洋保つ可し。日韓の運命亦貴重なる哉」(『北地国防論』)と言っている。西洋のアジア侵行にひととき敏感であつた岡本からすれば、朝鮮をめぐる日清間の対立はまさに内憂であつた。教科書『国史紀要』はそういった思いを抑えつつも、日朝交渉史においては随所にそれが表れてしまったという所であろうか。

### 第三章 『義勇芳軌』——義勇なる女性たちから

本章では個の歴史である『義勇芳軌』はいかなるコンセプトのもとに著述されたのかを論じてみたい。

本書は日本と中国における忠臣と義士の個人史を、それぞれ上巻と下巻に配して列伝形式で紹介するものである。序に次のように言う。

「忠勇義烈の行は、人の情の已むべからざるに発す。綱常を

扶植し、国基を鞏固にするに、貴賤男女を論ずることなかれ。蓋し道理は窮まりなく、是非は万変す。之を要するに、赤心報国より出づ。則ち稍中正ならざる者ありと雖も、亦之を輕義するを得ず。唯だ君子のみ古今を達觀し、參酌して之を進退し、其を漸く大中に帰せしむるのみ。吾嘗て和漢の史を閱し、忠烈の蹟を探り、窃かに其の師表とすべき者を択ぶ。世に随ひて編次し、男女を問はず、貴賤を一視す。分ちて内外二篇と爲す。内篇は邦人を列し、外篇は漢人を臚す。之を命じて義勇芳軌と曰ふ（『義勇芳軌』岡本自序）

まず「忠勇義烈の行」を「人の情の已むべからざるに発するものと規定し、加えてそれは「赤心報国」に他ならないことを述べる。すなわち、義勇とは国家に対して発動した場合に評価されるのである。これは幕末における志士たちの「狂」が公の場面においてのみ評価される（註12）のと近似する。これが本書の主張であると同時に、岡本自身のスタンスであることは、自序の末尾部に寄せられた中村正直と谷干城のコメントからも明らかであろう。

「中村敬字曰く「報国の二字は、吾が兄の本領にして、平生の著作は、皆此より出づ。他人の撰に異なる所以なり」と。谷隅山曰く「真に是れ世の道を裨補す。志士必読の書なり」と」（『義

### 勇芳軌』序）

内容については、自序に明らかなように、古代から当時に至る忠勇義烈の士の伝記と紹介であり、上巻に日本の士を、下巻に中国の士を配している。目次は以下の通りである（註13）。

上巻：日下部吾田彦・物部目連筑、紫物部大斧手・筑紫国造・大伴部博麻・和氣清麻呂・源義家・三浦義明・杵淵重光・源義仲・姦頼絵・北條時宗の諸将士・村上義光・僧良忠・楠正成・菊池武光・宇佐美定満・立入宗繼・大河内政房・清水高治・毛受家照・加藤清正・真鍋祐重・前田利家夫人高畠氏、永福妻加藤氏・山口右京亮滿弘乳母・尼妙林・細川忠興夫人明智氏・富田知信妻浮田氏・山田長正・浜田弥兵衛・杉田壺岐・宗五郎・甲賀孫兵衛・清水新次郎・蒲生秀実・平山潜・梶谷平蔵兵衛・松本重信・普治・渡辺定静及三栄・佐久間啓・月照・吉田矩方、橋本綱紀、頼醇、日下通武、高杉晋作、坂本良馬

下巻：蘭相如・公子無忌・樊噲・蔵洪・孫翊妻徐氏・劉敏元・荀崧小女灌・荀金龍妻劉氏・顏真卿・張巡・彦章・項德・傅察・歐陽珣・岳飛・馬肩龍・晏氏・密祐・文天祥・鄧弼事・張鐸妻于氏、頼南叔妻蕭氏、張国紘妻楊氏・閻典史・鄭成功・張大鵬

総計七〇数名中、日本の部に七名、中国の部に七名、計一四名の女性を取り上げられている。岡本が著作の中で女性の在り方（婦徳）に言及することは極めて希である。そこで本章では本書に取り上げられた一四名の女性（源義仲妾頼絵・前田利家夫人高畠氏・永福妻加藤氏・山口右京亮満弘乳母・尼妙林・細川忠興夫人明智氏・富田知信妻浮田氏・孫翊妻徐氏・荀崧小女灌・荀金龍妻劉氏・晏氏・張鐸妻于氏・頼南叔妻蕭氏・張國統妾楊氏）を、特に岡本が圈点を付した部分を中心に見てみたい。そして岡本の女性観の一端を明らかにしてみたい。

まず日本の部にあげられた女性たちは、いずれも薙刀を手に戦場に立つ姿が描かれる。木曾義仲の巴御前、前田利家の妻（含永福の妻加藤氏）、細川忠興の妻などは有名な所で、特に説明は要しないであろう。ここでは圈点部分のみをいくつか示しておこう。

「美にして勇。武技を善くす。軍に従ふ毎に、別に一部に將たり」(頼絵)

「頼絵 独り止まり、眉尖刀（まぎさな）を舞ひて健闘す」(頼絵)

「(義仲) 頼絵を諭して遁去せしめて曰く「死に臨むに妾を携へなば、人は之を何と謂はん」と。頼絵 従ひ死せんと請ふ。

義仲 之を強ふ。泣涕して辞し去る」(頼絵)

「後尼と為り、越後の友松に居りて、義仲の冥福を修し身を

終ふ」(頼絵)

「自ら眉尖刀（まぎさな）を提げて、侍女数人を率いて、昼夜城を巡り、粥を煮、醪（さか）を煖めて以て之に飲食せしむ」(加藤氏)

「(衆を励まして曰く)「昔楠公（註14）は天下を以て敵と為す。重囲を受くるも百日屈せず。卿等 守ること一夜にして、援兵

乃ち来る」と」(加藤氏)

「(永福へ) 曰く「末森公 陥つ。公は利家と死せ。妾は自刃して之に殉ぜん」と」(加藤氏)

「(家臣へ) 曰く「……若し勝たずんば則ち進み死せ。生きて還るなかれ」と」(高畠氏)

「艱苦するも節守ること年あり」(明智氏)

彼女らの働きは様々であるが、いかなる艱難にあつても毅然としてうらたえることなく、婦節（飲食配給などの後方支援や夫亡き後に尼となつて追福を行うなどがこれにあたる）を、時として士節（武器を持つて戦場に立つ、決死の戦いをいどむなどがこれにあたる）を全うした者として描かれている。

次に例として「尼妙林」の全文を挙げておこう（圈点部分には傍線を施してある）。

「尼妙林は林左京亮（むすね）の女なり。豊後の鶴崎城主吉岡掃部助に嫁ぐ。甚吉を生む。天正六年、掃部助 日向に戦死す。甚吉

は丹生島を守り、妙林は留まりて鶴崎を守る。島津家久伊集院美作・野村備中・白浜周防をして、三千余騎を以て之を攻めしむ。妙林多力なれば、敵の至るを聞きて、命じて壘を渡<sup>さ</sup>ひ壘を増し、陷<sup>おと</sup>罪を設けしむ。身<sup>み</sup>ら甲<sup>か</sup>を擐<sup>は</sup>き、長刀を横たへ、侍女を率いて親ら巡視し、酒食を設け、陣を守る者を励ます。薩兵争ひて登り、方に随ひて捍禦す。或は曰く「寡兵もて支え難し。請ふ降らん」と。妙林怒り、之を斬らんと欲す。既にして糧<sup>りやう</sup>竭<sup>き</sup>き、乃ち<sup>いっ</sup>伴<sup>ばん</sup>りて和して城を致す。三帥城に入りて、屢<sup>しばしば</sup>之を享<sup>もて</sup>なす。少艾を出し酒を佐<sup>す</sup>む。薩帥秀吉の親ら来ると聞き、兵を引きて還る。妙林伏を設けて之を撃破し、三帥を斬る。余衆潰走す。秀吉妙林を召すも辞して出でず」

末尾の秀吉の召し出しを辞退した点なども婦徳にあたるものとして考えてよからう。

この外、夫（富田知信）が戦死したと聞き、自らも戦死するつもりで門を開いて打って出、敵兵を倒して結果夫を救った浮田氏などの記述がある。

次に中国の部に挙げられた女性たちを見てみよう。まず「苟崧小女灌」の全文を挙げておく。

「晋の苟崧の小女灌は、幼くして奇節あり。崧は襄城太守た

り。杜曾の囲む所と為る。食<sup>く</sup>竭<sup>き</sup>勢窮す。救ひを故の吏の平南將軍石覽に求めんと欲するも、為す所を知らず。灌は時に年十三。勇士数十人を率いて、城を踰え囲みを突き、夜出づ。賊之を追うこと忽なり。灌士卒を督し、且つ戦ひ且つ前<sup>す</sup>み、魯陽山に入り、覽に詣り師を請ふ。又崧の書を為し、南中郎周訪に与へ援を請ふ。訪子の撫を遣り、三千人を率いて発し、覽の救ひの至るに会ふ。賊之を聞き敗走す」

このほか、少し変わった所では、夫を殺され、愛人となることを逼った仇を見事打ち倒した「孫翊妻徐氏」や、城攻めに遭った際、井戸が城外にしかなかったため、雨乞いをして人々を救った「苟金龍妻劉氏」などがある。

最後の「張鐸妻于氏・頼南叔妻蕭氏・張国紱妻楊氏」の三名を述べるに先立ち、以下のような前言が付されている。

「漢人の男女は死節を矜り、寇の至るを見れば、輒ち自裁し、敵の擒と為るを欲せず。即ち擒と為るも、亦肯て屈下せず。賞すべき者の如し。而れども奮<sup>す</sup>前<sup>す</sup>むの氣に乏しく、敵人の肆<sup>し</sup>に毒<sup>どく</sup>して忌むなきを致さしむ。明の方孝孺の十族数百人の手を束ねて戮に就くが如きは、貴ぶに足らざるなり。『明史』を読みて三女を獲。其の為す所は孝孺等に勝ること遠し」

ここで、漢人は敵の捕虜になることを恥じ、また仮に捕虜になったとしても決して屈することがないという風潮を評価しつつも、逆にそれが徹底的に抗う精神につながらず、容易に自決してしまふ傾向にあることを述べている。

于氏・蕭氏・楊氏ともに敵に屈することなく、最後まで抗った女性たちである。圈点部分に「今日必ず死す。蓋そ先に出でて賊を撃たざる。之を殺して斃さば、義烈鬼(註15)と為るを失はじ」(于氏)、「汝、我が刃を利ならずと謂ふか。我を犯せば必ず汝を殺す」(蕭氏)など、男勝りの発言が見える。また、三者ともに侍女らを統率する姿が描かれており、そのリーダーシップにも着目しているようである。

もちろん本書は義勇をテーマとするものであるから、そこに記載される女性たちも一様ではある。しかし『大日本中興先覚志』『日本維新人物志』などでも女性が多く取り上げられ、野村望東尼・黒崎阿時・津崎村岡をはじめとして、志士たちを支えた女性たちが数多く描かれている(註16)。むしろ明治二四年に書かれた『北地海防論』に見える次の一節(傍線部筆者)。

「我が神州の赤子たるものにして一念の此に及ぶことあらば、安ぞ痛憤流涕せざるを得んや。今日のため慮るものは、全国を挙りて死地に入り、一村一郷ごとに各自に防禦し、老若男女となく悉く兵器を執りて出陣すべきものと覚悟せしめ、常

に武技を以て博奕に易へて人生娯楽の第一とし、武技上達するものは富貴に日を渉ることを得べきやうに法度を立て、腕力勇壮にして一婦と雖も妄りに侮るべからざる風俗を養生し、尋常外人と接するにも毫も侵侮を受け泣寝入するが如き始末あることなく、家を造るも高夾の処に倚り、室中もしくは屋旁に深く穴ほりて多く土室を作り、平常は重器を蔵め置きて火災の患なからしめ、万一緩の時は兵器を執り土室に入りて砲銃を避け、賊の上陸するに至れば鼓声を聞きて一斉に挺出し、短兵接戦し奮死して屈せざるやうに経画したきことなり」(『北地海防論』)

から、国民が老幼男女となく一丸となって外敵に抗することが岡本の基本的なスタンスであったと考えられる。同時期に福沢が書いたような女性論(註17)が岡本に見られないのは、或いは岡本にもともと男女を区別する考えがなく、常に男性と共に生きる国民という視点があったのかもしれない。それは幕末の樺太移民論や明治二四年当時の千島移民論にしても同様である。移民とは男女ともにあつて、そこに新しい生活空間を切り開いていくものであるから、岡本における女性の存在は、役割分担はあったとしても、決して蔑視すべきものではなく、また福沢のような洋学的な男女同権論からでたものでもなかったのではないか。



おわりに

本論で論究した『国史紀要』『義勇芳軌』は、彼が死に至るまでの二〇年近くに渡って続く著作活動の中核を為したテーマの初出にあたると言ってよい。国体論を軸にすえた国史と、それを支えた忠臣・義士・節婦・孝子の列伝とをコンセプトとして書かれた著作は、本稿冒頭部にも示したように数多い（このことは同じく明治一八年に刊行された『古今文髓』に収録された文章を検討することによって補強することができよう。これについては、稿を改めて言及することとする）。

明治一八年のこれらの著作は、構想・執筆の時間を含めると、本稿でも言及した日朝関係、またそれに伴う日清関係が大きなうねりを見せていた時期でもある。よく知られる所をあげれば、福沢諭吉が「脱亜論」（明治一八年）を始めとして、「朝鮮人民のためにその国の滅亡を賀す」「朝鮮の滅亡はその国の大勢に於て免るべからず」（ともに明治一八年）を書いている。岡本の諸論を当時の潮流のどこに置くかという問題については、今少し著作の解析を行った上で改めて論じたい。

— 註 —

- (一) 大野堯運は報告社社長で、岡本の盟友有井進斎の『莊子評註』（明治一六）及び『史記評林補標準』（明治一八）などの出版も行っている。

この件に関しては「有井進斎の人と思想」（四国大学凌霄16、2009）を参照されたい。

- (2) 岡本の著作については拙稿「岡本章庵のメッセージ」（徳島大学国語国文学17、2004）において紹介した。また本論は阿波学会・岡本章庵調査委員会編『アジアへのまなざし岡本章庵』（共著・阿波学会、2004）第一章に加筆修正の上組み込んである。

- (3) 本書については、「岡本章庵『越山先生伝』訳註」（四国大学凌霄11、2004）を参照されたい。

- (4) 本書については「岡本章庵『大日本中興先覚志』訳註（一〜四）」（徳島大学総合科学部紀要言語文化12、15、2004、2007）及び「岡本章庵『大日本中興先覚志』について」（徳島大学総合科学部紀要言語文化16、2008）を参照されたい。

- (5) 本書については「岡本章庵『日本維新人物志』訳註抄（一）」（徳島大学国語国文学23、2010）、「岡本章庵『日本維新人物志』訳註抄（二）」（徳島大学総合科学部紀要言語文化19、2011）を参照されたい。

- (6) ちなみに本書の発行所である集義館は岡本が同郷の有井進斎や佐賀の谷口復四郎・秋永蘭二郎らと設立した学問所である。これについては註1既出の「有井進斎の人と思想」を参照されたい。

- (7) 西村清和・高橋文博編『近代日本の成立—西洋経験と伝統』第四章（ナカニシヤ出版、2005）。

- (8) 本写本については、「岡本章庵『烟台日誌』翻刻・訳註」（徳島大学総合科学部紀要・言語文化3、1996）を参照されたい。

(9) 本序文については、「岡本韋庵関係資料(二)」(徳島大学国語国文学 21, 2008) を参照されたい。

(10) 岡本が上記の策を記した文章については未見。ただし同旨のものは『亜細亜之存亡』(哲学書院・明治三年)に見られる。

(11) 本写本については、「岡本韋庵『北地国防論』『北地海防論』について(上下)」(広島大学東洋古典学研究 31・32, 2011)を参照されたい。

(12) この問題については拙稿「安井小太郎『明治中興詩文』について」(徳島大学国語国文学 20, 2007) 及び「水戸志士の咆哮―狂拳をささえるもの」(書法漢学研究 5, 2009) を参照されたい。

(13) 本文は各段ごとに中心となる人物が「」で括つてある。目次は各段ごとに「」で括つてある人物を提示している。

(14) 楠木正成のこと。

(15) この「鬼」は幽霊のこと。したがって義烈なる行為を果たすためには死をもいとわない、の意。

(16) これについては註4既出の拙稿「岡本韋庵『大日本中興先覚志』について」第三章において少しく言及したので参照されたい。

(17) たとえば『日本婦人論』(明治一八)、『男女交際論』(明治一九)、『日本男子論』(明治二〇) など。

―参照文献―(ただし註に示したものを除く)

近藤啓吾『講孟割記(上下)』(講談社学術文庫, 1980)

森川輝紀『教育勅語への道』(三光社, 1990)

小山静子『良妻賢母という規範』(勁草書房, 1991)

中塚明『近代日本と朝鮮(第三版)』(三省堂選書, 1994)

本山幸彦『明治国家の教育思想』(思文閣出版, 1998)

小山静子『家庭の生成と女性の国民化』(勁草書房, 1999)

松本三之介・田中彰・松永昌三『吉田松陰 講孟余話ほか』(中央公論新社, 2002)

西川俊作・岩谷十郎『福沢諭吉著作集 8』(慶応義塾大学出版会, 2003)

西澤直子『福沢諭吉著作集 10』(慶応義塾大学出版会, 2003)

関口すみ子『国民道德とジェンダー』(東京大学出版会, 2007)

岡本隆司『世界のなかの日清韓関係史』(講談社選書メチエ, 2008)